

佳作

あの瞬間を心にゆめへ

千葉県 柏市立光ヶ丘中学校二年 堀創太

シューマン、バーンというキャノン砲の音がアンコール曲の最後の一音とともにし、上からキラキラのテールが降ってきた。指揮者の合図で反射的にすっと立ったものの、眩しいくらい照明と鳴り止まない拍手の中、僕はどうしたらいいのかわからず、キョロキョロしてしまった。これまで味わったことのないような気持ちが入り込んで、クラリネットを握る手に力が入った。

僕は、昨秋発足した地域の学生吹奏楽団に、幼稚園の時の友だちに誘われて入団した。そして、入団約三カ月半後のこの日は、楽団の第一定期演奏会だった。団員七人で広いホールでの演奏。二百五十人を超す観客。プロによる本格的な照明。何もかも初めてだった。

演奏した曲は九曲。かなりのボリュームだ。しかしこの曲のどこが好きか考えて。楽しもう。どういう音が届けたいかが大事だよ。」
と言った。ハッとされた。そうだ、大事なことを忘れていた。曲を楽しむ心を思い出したら、不思議と指も音もスムーズになっていった。
本番当日、通し稽古の際、プロの方に、「おっ、仕上げてきたねえ。やるなあ。」
と言われ、思わずガッツポーズをした。その言葉に背中を押され、本番ではのびのびと演奏ができた。そして演奏後、会場中に広がる拍手は、あんなに変だったはずのことが一瞬で吹っ飛んでしまう程の破壊力があつた。

あの日ステージから見た光景、あの何とも言えない高揚感や仲間との一体感、ホールに響く音、そしてお客さんとの時間が忘れられず、大好きなクラリネットを僕は今日も吹く。

もそのうちの一曲は、今の僕にとっては超難曲だった。本番約二カ月前に楽譜を渡された時、愕然とした。うわっ、こりやまずい。新譜をもらったワクワクよりも不安の方が遥かに大きかった。約十二分の曲で、クラリネットはほぼ休符がない。十六分音符や三十二分音符の六連符の嵐。おまけに臨時記号だらけ。指使いがややこしい音の連続。参考音源の美しい調べとは裏腹に、演奏するにはもう泣きたくなるくらい、鬼の曲だった。実際、あまりの出来なさに涙が出てきた。こんなことは初めてだった。当日はプロの方がサポートしてくださるもの、団員では僕一人。僕が吹けないと、パートの音が無くなることになる。バンドディレクターは、音数を減らして簡単にしても良いと言ってくれたが、それは僕のせいで素敵な曲の雰囲気が変わってしまう気がして、絶対嫌だった。やるしかない。必ず吹けるようになってやるぞ。最大の難関は、曲後半の十六分音符の六連符、二十五小節連続だった。しかもスラーが付いており、滑らかに吹かなくてはならない。一音ずつスムーズに動かせる運指を探し、オンペースの半分以下の速さでワンフレーズずつ地道にさらった。しかし、一カ月たってもオンペースには程遠く、